ALLSORTS Vol. 21

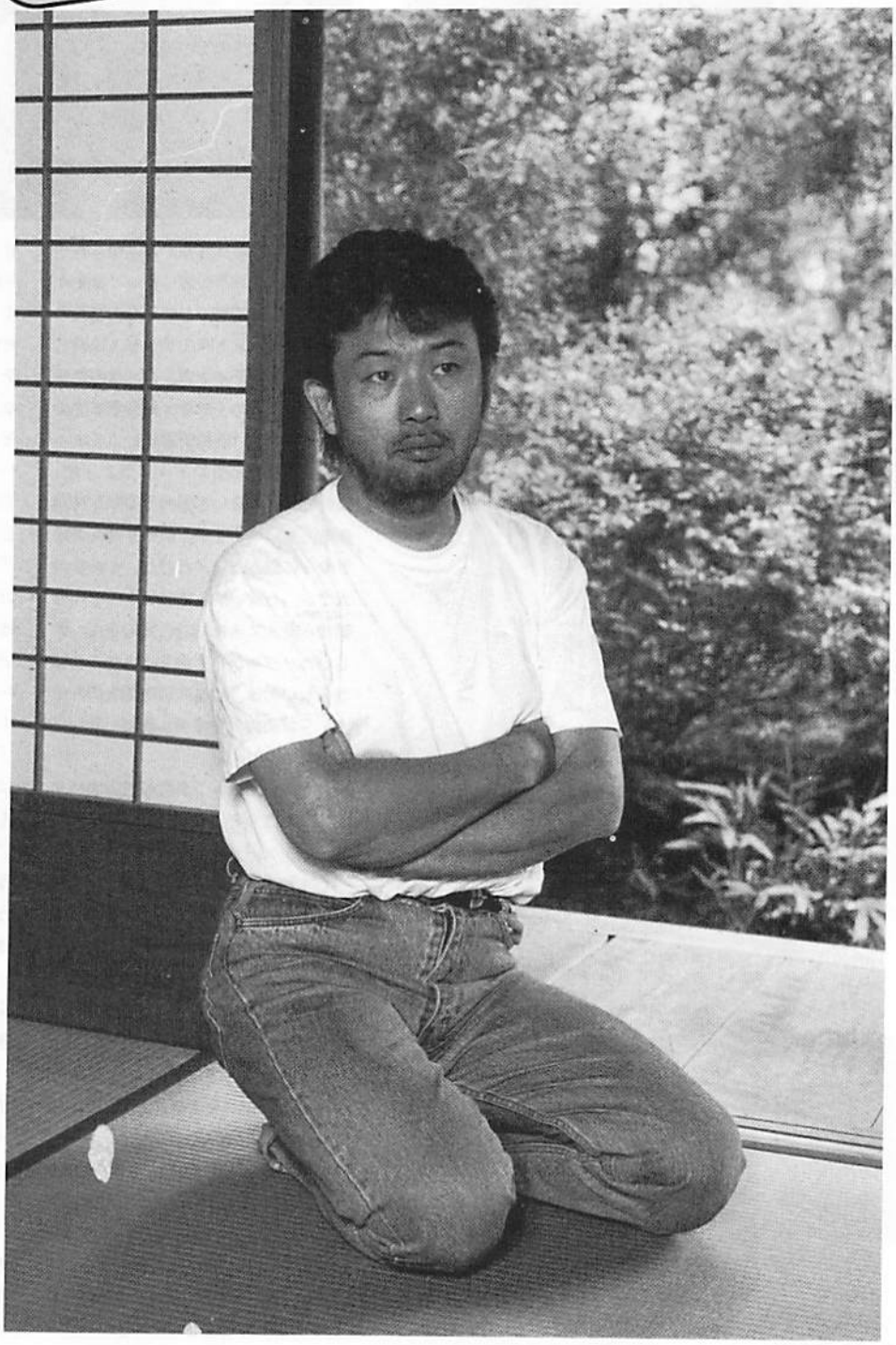
とくりき みちたか
デザイナー

MICHITAKA TOKURIKI

TEXT by 村上 慧
PHOTO by 内藤貞保

PROFILE
1951年、京都西本願寺絵所13代目として生まれた42歳。版画家の父、漆芸家・陶芸家の伯父に囲まれた職人家系に育つ。幼少期より大倉流狂言を学び茶道にも親んだ。同志社大学在学中に工芸の世界に目覚め修行へ。大阪芸術大学に転進し、卒業後はグラフィックデザイン・木工工芸を学ぶ。26歳の折、仲間と工芸〝はなせ〟を設立。現在は総合空間の設計者として各界で活躍中。

日本と遊ぼう。



花背の里・花竹庵では毎年八月十五日になると、火祭り〝松上げ〟を肴に人々が一献かたむけるのだという。それは工芸家集団〝はなせ〟代表者・徳力道隆氏と、氏の仲間たちによって催される。招待された人々はそこで実に巧みなもてなしを受けながら、炎が呼ぶ遠い昔の信仰にふれ、晩夏の一夜を送る。

陽光がかすかに揺らぐ午後四時。集まった人々が茶席へと導かれて催しは始まる。茶を喫する際、菓子として出されるのは、かき氷。通例の作法には叶わないが、そこが〝はなせ流〟である。暑い陽さしの中、客人にとっては干菓子よりも、のどを潤す冷たい氷はどれほどありがたいことだろう。

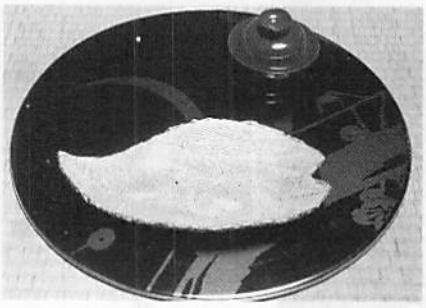
そうしてほっと一息、ほてりもひいた頃。人々は少しづつ、はなせの世界に惹きつけられてゆく。出される器。あたりの調度。傍らの花魁が着る衣装や、かんざし。それらすべては、はなせの手によるものだ。伝統を重んじながらも見事なまでに現代の空気と調和するしつらえの数々。訪れた人々は不思議なくつろぎの中で、知らぬ間に和の空間と遊ぶ自分を発見する。

やがて山野が漆黒に包まれ、方々にかがり火がともる。燃えさかる炎に影を映す里人たちの姿……

「策を企てて何かをやるのではありません。イヴェントでもないんですよ。今に残る伝統を、今、生きている我々がいかに楽しむか、ということです。たとえば、先ほど説明した八月十五日の集まりには、手桶に朝顔を一輪、巻き付けたものを床の間に置きますが、そのためにたくさんの手桶のそばへ朝顔を植えて準備します。

ね、憶えてますか？映画〝利休〟の中で咲き乱れる朝顔をぜんぶ摘みとっ

❶



❷

❸

❹

はなせ(離世)で作られた工芸品の数々。あくまでも日常生活で使えるものとして生みだされている。"日本のガラスをつくろう"として考案された美しいガラス食器。(写真①)漆黒の盆に乗る一葉の陶器には、"花"をモチーフにした和の造形が表現されている。(写真②)また、"はなせ"では茶道に対する新しい遊び心を提案。純銀に漆をかけて焼きあげ、古色を滲ませた茶釜に涼やかなガラス製茶道具の組み合わせはその一例である。(写真③)伝統的な茶の美意識を少しも損なうことなく、現代の風情にあった遊び心を巧みに引き出しているところは、まさに見事というより他にない。招き猫の置物は、ポスト・バブルに対する洒落。(写真④)昔の商店でよく見受けられた招福のシンボルを、オフィスやご家庭にもぜひどうぞ、というところか。『日本と遊ぶ』ことをテーマとして、使える工芸品づくりを目指す"はなせ"の姿がかいま見える、たのしい一品だ。

工芸家集団「はなせ」が生み出す
工芸の世界。
そこにはいつも、
もてなしの心に浮かぶ、
"日本と遊ぶ"人たちがいる。

て、ただ一輪だけ残しておくシーンがあったでしょう?同じなんです。この手桶のためだけに一輪の花を添えようと。利休が何百からひとつを選んだことも、我々がひとつを育てるためにしたことも心は同じでしょう。そこからほんの少しでも利休の境地をかいま見ることが出来れば……

そして訪れた人々がその花を見れば、それぞれの思いが残りますね。それが集まった人々の話題になり、コミュニケーションになっていく。他にもいろいろあるんです。ワインのテイスターをまねた陶器の器を首から下げてもらうとか。これなら物を食べながらビールも飲める。もって帰れば洒落た花活けにもなるんです。とても目新しいことに見えるでしょう?でも、すべての根底にあるのは、あくまでお茶の世界そのものなんです。みんなが楽しみながら、今の時代の中で、"日本と遊びたい"とね。

我々にとってたいせつなことは、そういうことを繰り返し経験していく中で、"必要なもの"を探り当てていくことです。それが、我々の云う"工芸"なんですよ」

出逢ってわずか数分とたたぬ間に、火祭りの模様を熱心に説明した。大きな声。早口な語調。だが、威圧的なものではない。熱意、という観念に生命を吹き込めば、きっと氏のような人物が生まれてくるに違いない。

氏が工芸の世界と関わりをもった動機は、古い時計のコレクションにある。巧緻を尽くした美しい外観、時を計る道具としての機能。版画家の父、陶芸家の伯父から受け継いだ血が、それを前にめざめたのか。

修行時代は、さまざまな工芸展に応募した。二〇数回の受賞を果たすが、振り返ればその中に"使える"道具はひとつとして見あたらなかったという。再び己の行く道を見定めようと、花背の里に腰を据えたのが十五年前のことである。当時仲間たちと始めた、はなせの資本金はわずかに九万円。自分たちの手と足と、想像力だけがたよりの日々だった。

飛躍のきっかけは二〇〇円で売っていた陶器からつかんだ。時には数十個と買占められたそれは口コミで評判を呼び、やがて東京の百貨店から催事の誘いがかかる。季節は夏。彼等は訪れたお客さんに、商品を買う・買わないに関わらず花背の水をプレゼントすることを試みた。時ならぬ京の山水に渇きをいやした人々が、次々と商品を買っていったのはいうまでもない。彼等は大成功を収めた。

ただ、徳力氏をはじめ、若い彼等が最初から売上を得るために山水を持ち込んだ訳ではない。暑い中、会場に来てくれたお客さんに、せめて一杯の水でも、と思いついただけである。

今では、"はなせ"も株式会社となり、工芸品のみでなく、多方面で活躍の場を得ている。店舗やレストランのプロデュースをはじめ、ホテルなどの空間設計や演出は、今や重要な仕事だ。

工芸家集団"はなせ"が生み出す工芸の世界……

そこにはいつも、もてなしの心に浮かぶ、日本と遊ぶ人たちがいる。